
恋と疾走惑星の二重奏

ハローウルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋と疾走惑星の二重奏

【Nコード】

N2081F

【作者名】

ハローウルマ

【あらすじ】

異星人オティヒとの混血アリサの冒険と恋。短命なオティヒは争いを繰り返す。人類の歴史を再現するような戦争に、純粋な愛で立ち向かうアリサ。怨霊の力を結集して地球までも支配しようとするエラマはバージョンアップして権力者を操る。ヒツタイト崩壊から始まり、そして21世紀ファイナルバトルは始まった。ライトノベルふうSFファンタジー。

1話 旅立ち

少女の瞳がみつめる向こうにあるのはなんだろう。

ガラス窓から窺う、ススキと尖ったところが剥きだしの岩という情景に同化されそうで、かたちの良いピンクの唇を噛み締めて乙女の哀愁を漂わせる。

「アリサちゃん。山田主任が呼んでるよ」

馴れ馴れしく声をかけるのは紺條翔太。彼女は返事したい衝動を我慢して無視する。孤独つてのに浸りたいのね。

ここに未練があるわけでもないけれど、外はもっと未知の世界だ。しかし行かねばならない。

「どうした。便秘か」

彼が右隣へ近づく気配で反応してしまう。

「ええーい。鬱陶しい。なんつー発想してんのさ」

振り向き少女らしからぬ言葉が良く動く口元から飛び出す。あまり雰囲気を感じる男と思ってなかったアリサ。

彼女は顎の線が柔らかく幼い頬にえくぼが浮かぶ。大きな目に澄んだ黒い瞳が輝き、鼻筋も通る美少女。背中まで伸びる硬質で艶も良い黒髪がエアークンディショナーの風にたなびく。

「元気はあるじゃん」

翔太は安心したみたいに笑う。もっとも男お多福顔はいつも笑っているように見える。

「シリアスに決めようとしてんのに、あんたはさあ」

「似合わないよ。アリサちゃんに」

「じゃ。なにが似合うっていうの」

彼女もここで相手のペースに乗ってしまったのに気付く。でも不快ではない。この二人は幼馴染みたいなものだが、かなり違う。

「元気な笑顔が良いよ」

用件は忘れた感じの翔太が彼女をみつめて言う。

「いつも能天気な翔太とは違うんだから」

彼の思っ壺にはまり笑顔で見上げて笑みを見せる。彼女の身長は百五十センチだから、ほとんどの人間と話すときはそんな格好になる。

大きなガラス窓から陽が射して二人を包んでいた。

アリサは淡い緑のタイトスカートにブラウス。翔太も同じ色のズボンと肩の張った上着姿。惑星管理局の制服だけれど、そんなに大袈裟な組織ではない。

「それで。なにか言ってなかった」

「山田主任が捜していた。なにか悪戯したんだろ」

いつものように喧嘩を仕掛ける一言も忘れない。彼は二十歳で、ここへ来て一年目。彼女が物心ついたころからそばにいた。わずかひと月だけれど唯一の友達で喧嘩相手。恋というのを知らない女の子にとつて特別な存在なのは確かだ。

「なにも。じゃ。晩御飯のときにね」

主任がしたい話の内容は予想つく。惑星管理局主任の山田麻耶は彼女の母親でもある。そして、生後ひと月ちよつとの子供をこの惑星で住人の中へ紛れ込ませる計画を実行する日が近いとアリサは感じてもいた。

生後ひと月なのに十代半ば過ぎの少女に成長する人間なんているはずもない。アリサは惑星『アイスプラネット』の住人オティヒと地球人の混血だった。

うんとね。アイスプラネットは原始地球のことで、同じ状態だから凍った星と名づけられた。その巨大彗星が太陽の引力から抜け出せずに惑星として公転し始めたのはかなり前のことだから、もう忘れたでしょ。

実際は彗星でもなくて地球タイプの放浪惑星とでもいうのかな。表面の氷が解けて、生物活動が確認されてから調査も進められたけれど、高度な知能を持つオティヒの登場で意見は分かれる。

異星人として友好を深めるか、新たな人類の仲間として地球政治

機構に取り込むか。似ているみたいで扱いかたはまったく違うんだからね。

しかし短命なのね。オティヒの寿命は最長十二日まで記録されているけれど、ほとんどは生後四日で病気になったり事故に遭う。

最初のころはオティヒと接触もした地球人だけれど、新たに大気が汚染されていると気付いた。地球と同じ成分なのに、肌が荒れて喉も痛くなる。正体不明の物質があるのは確かなのよ。

んでもって、この星へ移住するとか観光するなど控えたいし、友達になるには短い寿命だから、見守ることにしたの。それで、惑星管理局が設置されたわけ。

地道にこの星の調査をしてるけれど、短命で文明なんて考えられないでしょ。なんと子供へ記憶が刷り込まれるみたいなの。両親の経験を覚えてるわけだけれど、個人差はあるらしいのよね。それで好奇心と名誉欲の強い地球人がやることは決まっている。

のんびり生きるオティヒの生態研究の実験動物としてアリサは誕生させられたの。ひと月でこんなに大きく成長しちゃったけれど、そのあとは普通の地球人と同じなのよ。

農耕を始めたオティヒの集落で長を務める男の精子を採取して麻耶は受精した。この星の記憶と地球文明を潜在意識に宿してアリサは産まれた。

そして未知の世界へ少女は旅たつ。

1話 了

2話 最強の護身用ペット

気密室を開けると広がる朝もや。麻耶が眉を潜めながらアリサの手をひいて外に出る。

「ママ大丈夫なの。気分悪くならない」

汚染された大気の中にと肺や皮膚に異常を感じてくるから、人間はこの惑星に押しかけようとはしないし、地球みたいな環境に惑星改造する技術はまだなかった。

「平気よ。いいこと。地球へ行つて正式に子供と認めてもらうから。少しの間、隠れていて」

案外冷静な母に見えるけれど、考えた末の結論なのはアリサもわかる。オティヒは記憶の遺伝が可能で、はつきりではないけれど、異星人の精子で妊娠する決意をしたときからの予定行動なのは感じている。それに知りたくない現実までわかった。

地球人はオティヒの解剖や人体実験も過去に行い、アリサも冷凍保存されて地球の研究室へ持つて行く計画なのだ。当然蘇生術は完成してない。

麻耶が取れる行動の選択肢は多くない。主任としてこの惑星住人への愛着と、母の行動としても当たり前のことを実行したまでのこと。

ドアが閉まり取り残されたアリサだが、ゆっくりしてられない。惑星管理局にはほかに主任クラスがいて、彼女を解剖しようとか、早く地球へ送ろうと狙っている。いずれにしてもアリサの人生はジ・エンド。麻耶が地球へ行っている間になにが起こるか不安もあり、この世界へ子供を送り出した。

窓明かりに映るアリサは動きやすい淡いピンクのミニフレアスカートと胸に刺繍飾りのあるブラウス。左の腰に革製のポシェットを下げる。長い髪は半月型のバレッタで留めて、歩くのに合わせてポニーテールが揺れる。

剥きだしの岩をまわり込むと、朝焼けにカタバミの広がりが浮かぶ。道なんてないし、歩きやすい草むらや平らな岩の上を進んで行く。彼女にあてはある。最初この惑星へ来たときのキャンプ小屋があるはず。話に聞いたただけだけれど、すぐ近らしい。汚染された大気に耐えられないで、惑星管理局から追ってこないだろう。

（こんな気持ちいいのに、どこが汚染されてるんだろう）

心で呟き深呼吸を試みる。草のむせるのも刺激というより心地良い思いにさせる。オティヒの血が大気への順応力も与えてるのでしようかね。安らぐ頭というか心はどこからか水が流れる音に気付く。

右斜め前に岩がそびえる。そのふもとのアワユキセンダン草を掻き分けると、窪んだ岩に水が溜まり惜しげもなく溢れて左へひと筋の流れを作り小川を形成している。

湧き水だから飲めるだろうと彼女は判断した。父であるオティヒの記憶が安全なのを知らせている。汚染された水も身体に悪いけれど、なにで汚染されているかが問題だ。地球では純粋H₂Oと完全制御された空気清浄機のもとで生活している。汚染ではなく自然の状態だと気付くにはまた、地球の自然環境は悪化していた。

「ここで水を汲んで、近くに食べられる芋や果物もあると言ってたけど」

それは母が危険を犯して飛行籠で確かめたようだ。ともあれ、歩いてきて喉も渇く。小気味良くなりよる流れる音が、水面に映る青空をすくい取ろうという悪戯っぽい思いにもさせた。

冷たい水が指に染みて掌で空が揺れる。合わせて持ち上げた掌を影が暗くした。後ろに何者かが立っている。

アリサは水面の上で合わせた掌が震えるけれど、その両肘を掴まれて指から水もこぼれる。

「立ちな」

太い声で相手が喋り、上に引かれるみたいにされるから痛いし、

膝を伸ばすしかないでしょ。

「なんなの。あなたは」

惑星管理局から来た追っ手ならもう少し丁寧にするはず。顔も見えないし不安。声が上がらるので相手は地球人と気付く。だけれど、ここに住み着いている話は聞いてない。初めての状況で、なにが起こるか予想できない。だから想像して怖がるとも違う。

「歩くんだ」

命令されなくても後ろから押されて前に進む。荒れた指の感触が伝わる。

「もう。会話になってないじゃん。なにか用事なの」

アリサはどこまで呑気なのかわからないけれど、自由が利かないことに不満なのね。

「度胸のある女だ。少し待ちな」

彼は立ち止まると、アリサの手首を合わせて皮みたいな片手で掴み、もう一方で、がさがさ、と近くの草を引きちぎる音がする。

「久しぶりに地球人と会うが、ゆっくり楽しませてもらう」

草の茎らしいのを彼女の手首にまわすと、両手を使い手首に巻く。「やっぱり地球人なんだ。どうしてここにいるの。空気とかで気分は悪くならない」

「へんな子だな。もう慣れたさ。きみはどうしてここまで来たんだ」
彼も事情ぐらいは知りたくなっただけらしい。

「うんとね。ママが地球人になる許可を取りに行つて来るまで隠れてなさいって」

彼には意味不明の話と思うけれど、それ以上の関心もないみたい。
「そっかい。まあ。座りな」

手首に茎を巻き終えると手を放して、彼女の前に来る。彼は無精ひげを生えるに任せた顔。着古した淡い緑の服は破れたり肩のほうがよれよれだけれど見覚えもある。

「管理局の。なぜここにいるの」

「局を出てから二年になる。オティヒの女も飽きてたところだ」

えっち視線でアリサの全身を舐める感じ。相手がなにを考えているか経験もないけれど心地良くはない。

「へんな目つきだね。なにかおかしい」

お洒落着なんてないし、いつも惑星管理局の外で遊ぶときの格好をしている。

「おかしくはないが」

彼も拍子抜けした顔。やがて視線を一点に集める。

「変わったベルトだな。流行りか」

ピンクと黒がまだら模様の革製ベルト、に見える。留め金は見当たらないし、ベルトの仕組みで締め付けるようになっていたのしょうか。前の部分が細長い楕円形をして盛り上がり、ピンクと黒を基調に複雑な模様が描かれて花の絵にも思える。

「違うよ。ピンキーちゃん。ペットなの」

「ああ、そうかい」

なにか納得したらしく同情した顔になる。ベルトがペットなんて頭がおかしくなり、ここまでさまよい出てきたとしか思えないよね。でも彼女はいたって正常で正直、少し天然ボケがはいるけれど。

「おれが面倒みてやろう。おもしろくなったぞ」

呟くように言う。優しい声で、座って、と肩を押す。素直なアリサは膝を曲げて座ると彼を見上げる。

「お話するのも良いけど、手が窮屈なの」

「そういう遊びなんだよ」

屈んで手を伸ばすと、ブラウスのボタンに指をかける。

「うわー。いけないんだー。はしたないこととママから言われてんの」

「ここにママはいないぜ。へんな子だが、久しぶりだ」
ボタンを外しにかかる。

「ねえ。なんの遊びなの。ピンキーも仲間にいれていい」

「ああ、良いよ。どうせ外すからな」

スカートも脱がすつもりらしいけれど、アリサは舌を、ちゃっち

やつ、打って鳴らす。

「かわいいもんだ」

唇の動きで彼は幼い顔に色気も感じたらしい。汚れのついた顔を近づける。

「キスをしよう。これも遊びだよ」

「きす。あの、なんのこと。遊びに説明ってのが必要だね。翔太は勝手に決めるけどさ」

「そうだな。いいかい」

彼が両肩に手を置く。その間へ伸びてくるピンクと黒がまだら模様
様の細長い。楕円形の部分は平たく広がり弧を描く。先端が小さな
三角型でぬめりてかる。そこが横に裂けて二本の白い牙が覗く。

「な。なんだ」

後ずさる彼。ベルトが勝手に動いている。

「ピンキーちゃんだよ。挨拶したいんだよ」

この星に生息するヘビ亜目コブラ科の一種だけれど、彼は知らない
らしい。ペットに成り下がったおとなしい蛇と考えたようす。

「ピンキー。邪魔だどけ」

コブラの生態もわからないのか手で払いのける。大きく揺れるピン
キー、しゃあー、喉から摩擦音を発して彼の指を咬む。

「ぎゃっ」

彼は転がり痛がる。

「毒があるけど、どうかなー。噛まれたことはないからわかんない
し。お薬もここじゃ、ないよねー」

困った顔をするアリサ。あまり状況つてのを理解しない女の子み
たい。

彼は仰向けになり全身をびくびく痙攣させている。ピンキーも怒
りが収まったか、彼女の前に頭を持つてくる。

「撫で撫でして欲しいのね。でも、手がちよつと動かせないの」

それに反応して腕を伝い、手首の茎を噛み切る。器用な蛇だけ
れど、なんせ異星の生物だから。人間の常識なんて通用しないかも。

ベルト穴へ収まりちよろちよると赤い舌を出してから頭を頭巾の中へ埋めるピンキー。

「そうだお水」

もう一度池に戻り、両手に受けてごくごく飲む。ここから小屋は近い。いまのところ目的地へ着くことしか考えない。だけれど、翔太のことをなぜか思いだす。惑星管理局から出たことを知り心配してないか、彼が捜しにくるなら歓迎もしたい。

（なんだっ たんだろうさっきの男は。翔太から聞いてみよう）

翔太とはいつものように会える気がするし、会えないと考えるのを止めてもいる。

「遠いのかな地球は」

距離は聞かされてもいるし呟く。本当は心の中に虚無の空間が出来ているのを感じてもいる。ほかの主任たちに利用されるよりはましだけれど、一人で生活するということさえ初めてだし、ここは未知の世界。生きるのを選ぶのは孤独でもある。空を見上げれば朝焼け空に千切れ雲が戯れるけれど、滲んできて目を擦る。それでも瞳を潤す液体は内側から溢れた。

2話 了

3話 遅いつつの！ 翔太

カタバミの群れが途切れると丸っぽく大きな岩があり、小石も散乱している。その裏へ高台になる斜面が続き手前に小屋は在った。ジュラルミンの銀色もくすんでつる草が覆うさまは角ばった森を思わせる。

「入れるの」

思わず呟く。その前に住めるのかしらね。近づくとも高さは三メートル、壁に惑星管理局の部屋と同じドアがある。ノブを回すと開いた。湿った暖かい空気が中から漂いすぐに入るのは躊躇する。

初めて人類がここへ来たのは十年前、風雨に晒されてもどうにか機能を保持しているみたい。安心もするけれど、やっぱりいやだなー、と中で生活するのは控えたい。

近くの小石に腰かけてポシェットを開く。掌に収まる小型ライトを取り出して隣の石に置く。ソーラーパワーで使えるからエネルギー補充のつもり。そしてブラウスのポケットから取り出したのはふたつのプレスレット。

（やっぱり必要なんだわ）

低周波電磁発生装置なんだけれど、痴漢撃退用品として最近売り出したと母が地球から送ってもらったらしい。さっきの男のことを考えるとほめておくべきと思う。絶縁帯の布地を肌当て、両方の腕にはめ込む。湾曲を描く表面はきらきら金色に光るけれど、薄いシャツなら突き抜ける細かな針の集まりだ。

低いエンジン音が空から聞こえた。飛行籠だ。アリサは小屋の壁に寄る。さっそく捜しにきたみたい。場所の予想はつくだろう。

空に翼を広げる飛行籠が横からの太陽を反射して輝きはつきりに見える。うんとね、造りはハングライダーなのね。

軽量プロペラを回して風力を得るけれど、音が聞こえるということとは着陸準備をしていることになる。旋回しながら近くの草原に降

りるようだし、小屋の後ろにまわるアリサ。この大気の中で長くは居られないはず、その間隠れていれば助かる。

四角の籠から二本の足が見える。エンジン音がとまり、鳥が降り立つように飛行籠は着地して、羽が傾く。

籠から出てきた人物は身体に張り付く黒いスーツを着て、ヘルメットを被り背中にボンベを背負っている。

「大袈裟だわね」

もうひとつの大陸を探検調査するときの格好だ。まるで宇宙空間か海の中へ行くみたいなた姿だけれど、彼女ものんびりしていられない。

「逃げる、それとも戦う」

どちらにしても黙って捕まるつもりはない。バレッタを髪から外す。長い髪がさらさらと背中を覆う。風がふわりと髪を浮かせて泳がせる。バレッタの留め金あたりにあるボタンを押せば、二十センチほどの細い短剣が伸びて朝日に光る。

呑気なアリサでも自分を解剖したり凍結標本にする目的の人間に心を許すわけもない。父の遺伝子が闘争心つてものを表面に出させるのね。

相手は小屋に近づくなにかを見つけたらしく手にする。小型ライトを置いたままだと気付くアリサ。ここにいと知らせるようなものだ。ドアの開かれたのにも気付いたらしい。急ぎ足で向かう黒いスーツ。

「痛いかなー。でも、懲りて追いかけてこないはず」

バレッタ短剣を構えながら小屋の前にまわる。これで刺したら死ぬ、との概念はまだ彼女に無い。

相手は中へ入ったみたいだが動く気配がして外へ出てくる。

「帰って」

短剣を顔あたりに突きつけて言う。フードの中の顔は驚いたように目が大きく開くけれど、口も大きく開けて、くぐもる笑い声もれる。完全気密ではないのよ。

「なによ。子供とばかりしてるんだわ」

本気だと教えたくて近づく。見上げるヘルメットのフードが取り払われた。男お多福顔が堪えられないというぐらいに、身体も揺すりながらまだ笑っている。

「しよう」

名前を言いかけて止める。緩む頬を必死に引き締める間喋られない。

「アリサちゃんも勇敢だ。元気じゃん」

彼は、どうにか横隔膜の揺さぶりが収まったらしい。

うつとしいのもいなくて清々してるところと言いたい。バレッタに短剣を納めながらしかめっ面になろうともする。

「遅いっつーの！」

いや、そうじゃない。つい正直に言葉が出てしまった。

「朝飯も食べないで会いにきたのだぜ。何時間ここにいるの、アリサちゃん」

やけに丁寧な声で名前を言う。黄金色の朝日がまだ新鮮な一日の匂いを香らせる。確かにいつもならそろそろ食堂に座る時間かもしれない。へんな男に会ったとはいえ、母と別れて三十分はすぎただろうか。

「なにをしに来たのよ。紛らわしい」

「そりゃない。遊びにきてやったんだぜ」

「あいにく退屈はしてないわ。さつきも管理局にいたという人に会って喋りしたんだから」

「このさい、そういうことにしておく。」

「へえ。本当なんだな」

翔太は興味を持ったらしいけれど、ボンベの管を引き抜き、直接口に当てて空気を吸いながら話す。それでも痒いらしく窮屈そうにヘルメットの中の頬を搔く。

「最初のころは住人と接触して、ここの空気に慣れた人が何人か才ティヒと一緒に生活していたと言う」

「干渉しちゃいけないでしょ」

この星がどのように進化するか純粹に觀察する方針がとられて、いまの小規模な惑星管理局だけが残っている。

「だから、みんな引き上げたと管理局の日誌には記されてるが、残るものもいたらしい」

「なにをするのよ。局に連絡もないし、勝手にしてるわけなの」

「どうかな。背も高いし、寿命がオティヒよりかなり長いから目立つだろ。うまくすれば神としてこの世界を支配してるはずだがそんな存在は確認されてない。悪魔みたいに受けとめられて居られなくなった可能性もあるわけだ」

翔太も二十歳と若いが、惑星管理局に働くほどの人材ではあるらしい。

「そうか。ひとりぼっちだったんだ」

「だれが」

「さっき会った男の人。でもピンキーちゃんに咬まれちゃって痛がつてた。かわいそうなことをしたかな」

それに驚く翔太。

「やばいぜ。どこでだ。助かるかな。ま。ちゃんと葬ってあげよう」
彼としては地球人として亡骸でも回収したいのね。

「すぐ近くの池みたいなところ。一人で寂しかったんなら遊んであげたのに」

べつにあの狼藉につきあう意味ではないのよね、たぶん。悪魔と受け止められていらなくなつた、というのがなんとなく同じ境遇に思えてしまったの。母の遺伝子は心優しい女の子の部分を用意させている。

そんなわけでデート、違うでしょ。さっきの池に向かう二人です。永久に動けなくなつた元地球人を管理局へ運ぶのは翔太一人でやるしかないらしい。重いけれど、主任たちにアリサと会わせたくないのね。

でも予想外というか、池のある場所のアウユキセンダン草が揺れ

て無精ひげの男が現われた。

「あら。大丈夫、痛くなかった」

アリサは声をかける。悪気はない女の子だし、元気じゃん、と翔太を小突く。

「ここまで来やがるのか」

元惑星管理局員が言葉を投げつけると、翔太を一瞥する。彼は忙しく酸素を吸うと、管から口を放す。

「話を聞かせてくれ」

「いまさら言うことはないさ」

呟くと右へ走り出す。

「ちよつと。せつかく友達になれたのに」

アリサは雰囲気を読み込めてないし、この世界で友達になれると思っている。それで小走りして追う。

「慌てるなよ。アリサちゃん」

呼び止める翔太だけれど、二人は遠ざかるし、痒くて鼻もむずむずと花粉症みたいになる。一時退却だね、これじゃ。

3話 了

4話 虹色の剣(つるぎ)

無精ひげの男は草の根や石を避けたりして軽く跳んで行く。後ろから少女がフレアスカートを翻し、たまに躓きながら追う。揺れるポニーテールへどこからか蝶がきて戯れている。

ススキを掻き分けて彼が消える。アリサもなぜ逃げるのかしらと思いつながら背丈より成長したススキの間を潜る。

「あれ。変なところへ来ちゃった」

思わず呟く。砂利が細長く敷かれて横に続く。ハート型の葉をした植物が行儀良く並んで、前を覆う。アリサもこれがオティヒたちの主食だと知っている。石芋と父の時代は呼ばれていた。住人が植えてあると思う、実際砂利道もあるわけだし、畑なんだろう。

無精ひげの男はどこに行ったか、迷うところに近くで悲鳴が聞こえて、何人かで騒ぐ声が飛び交う。オティヒたちだろう、こんなに大勢の地球人がいるとは思えない。

「あそこにいるのかな」

無精ひげの男がなにか厄介ごとを起こしたのかしらね。彼は遊び方が下手と感じているアリサ。手を縛られたのも、遊びのルールつてのを最初に説明しないから意味もわからなかったと解釈している。まだひと月ちょっとの人生経験では親の知識もうまく活かせてないのね。

石芋の群れを掻き分けるとすぐに、刈り取られた広場。三人の女の子が五人の男に囲まれてるの。オティヒも初めて会うけれど、父の記憶とは服もかなり違う。

女の子は大きなバスタオルを身体に巻いたふうにして紐で腰を縛る。ちゃんと胸も外れないように飾りにもなる紐がついている。枯れ葉色だけれど、まだ染色技術がないからなのかはわからない。

男は簡単で、法被みたいなのをまとい、トランクスをはいてる感じなのね。衣食住も最低限確保すれば良い時代で、彼らは短い寿命

でもゆったり生きてたの。

それでも平和とは限らない。男たちは女の子の持つ網に入った芋や葉っぱを無理やり奪い取る。父の記憶でこの星のルール違反と感じた。

がさがさ、草を掻き分けて急いで彼らへ近づく。気付いて注目するオテイヒたち。彼らは小柄で、人間の小学生ほどにしか成長しない。

「だれなんだ、おまえは」

男のリーダーらしいのが前に出て聞く。日焼けした顔に視線がきつい。他人と仲良くする感じに思えない。だけれどアリサは顔色を窺うことなんて知らない。

「あたし、アリサ。いけないんだよ、人のもの取っちゃ」

「説教か。図体は大きいがおかしいんじゃないか。強いのが欲しいのを手にいれる、自然の摂理ってやつだ」

喋りながらアリサを観察する。確かに見上げるほどの身長で最初はびっくりしたはずだけれど、まだ世間を知らない子供と判断したみたい。

「殴られなくなったら、さっさとどこか行きな」

「この人たちへ返してって言うてんの。悪いことする人をみたら注意するのは父から習ったわ」

記憶から父ならどうするかと判断しているわけだね。

「うるさい餓鬼だ」

もうひとり男が並ぶと、口元を歪めてリーダーに耳打ちする。

「そりゃそうだ」

アリサを無視すりに決めたらしい。女の子の中から一人の手を引く。

「一緒に来てもらう。部族長にお土産だ。メイドになりな」

「それは止めて」

止める別の女の子だが、男に拳で顔を殴り倒される。アリサはその中へ駆けて割り込んだ。

「暴力はいけないわ。それに誘拐は罪が重いの」

「ここじゃ通用しないぜ。なんなら力づくで取り戻すかい」

「もう。暴力とかは好きじゃないけど」

干渉してはいけないけれど、父の正義感と母の優しさはどちらもあとへ引けない思いにさせる。舌を鳴らすとピンクーがにょにょとアリサの腰から解かれて地面に降りる。

「アタマヘビか。触らなければおとなしい」

リーダーにはピンクコブラの記憶も残っているようだ。おいおい最強じゃなかったか、と不満もあるはずだけれど地元の人が詳しいんだからしかたないじゃん。

「どうせ餓鬼の浅知恵だ。それよりこいつも連れて行こう」

二人の男がアリサに近づく。ピンクーは吞気に枯れ草の中から虫を探しているらしい。

「困っちゃうなー。きつと痛いはずだけど」

バレッタを外してボタンを押せば、護身用剣が飛び出す。捕まりたくはないけれど使い方はまだわかんないし、叩いたり突いたりすればいいのかな。

「なんの棒きれだー」

ここでは刃物があまり普及してないかもしれない。だからちよつと光沢のある小枝ぐらいに思っているのね。一人の男が手を伸ばして掴んじやった。ふぬっ、力を入れて取り上げようとする。

「あっ、つつ」

痛がり指を広げて手を放す。そこから濃い赤色の液体が放物線を描く。

「多分切れちゃうよ。言うのが遅かったかしら」

アリサはむしろ心配するような口調。

「危ないやつだ。それをよこしな」

リーダーは武器として使えろと考えたわけなのね。

「それより仲間が痛がつてるでしょ。お薬はないの」

「ふんっ。怪我は付き物だ。よし、これでどうだ」

捕まえていた女の子を抱き寄せると首へ指をまわす。

「締めるぜ、助けたかったら。その変な棒をよこすんだ」

「最テー。信じられない。息が出来なくなっちゃうじゃない」

「そのつもりさ、きみしだいだ」

息ができなかったらどうなるかまでは考え及ばないアリサだけれど、息を止める競争みたいな遊びを翔太としたこともあり、苦しいのはわかる。

「ほんとに怒るからね。これで突いたら痛いよ、多分」

剣先をリーダーへ向ける。彼の指にも力が入り、女の子が苦しそうにあえぐ。

「どっちが先かな。おれはよけることもできる」

駆け引きなんて知らないアリサ。望みはひとつ。

「離しなさい！」

アリサの大きな声が木霊して七色にあたりが輝く。護身用剣が輝いているのだ。そればかりではない、虹の放物線を描き逸らしたはずのリーダーは胸元が貫かれる。

「うげっ」

喉から断末魔のうめきがして腰から崩れ落ちて行く。

捕まっていた女の子は座り込んで、なにことが起こったかわからない顔でアリサをみつめる。オティヒたちが何歩か退くけれど、一人の男がリーダーの身体に触り、胸に耳をあてる。

「死んでる。あ。あ。あなたは」

震えながら立ち上がる。人を殺される場面も経験がないらしい。それよりアリサも状況を飲み込めてないし、いつもなら説明してくれる翔太がいない。

「死んでるって、生きてないことだよな」

仰向けに転がるリーダーに近づく。女の子が膝を引きながら逃げる。男は立ち去るうにも動けない感じで足が震えている。

「こ。ころした。そ。そこ、こ」

言葉になってないけれど、アリサは自分の責任と感じた。

「こんななるなんて。痛いだけと思った」

涙が零れる。だけれど、拭いてるときではない。リーダーの横に跪きはだけた胸元に両手を置く。ブレスレットが垂れて男に触れると彼の身体がびくつと動く。びくびく、小刻みに震えながら四肢が踊るみたいにはたばた地面を叩く。低周波電磁発生装置が彼を痺れさせたわけだけれど、心臓マッサージまでしてしまったみたい。

「き。さまぁー」

彼の目が開いて起き上がろうとした。

「生きてる。眠ってたんだね。心配したよ」

つい抱きついてしまっけれど、彼が勢いよく跳ね飛ばす。

「凄く痛いじゃないか。しかし」

彼も本当に死んだ経験者、いままでにない恐怖を味わっている。近くで震えていた男が駆け寄り説明する。

「この子は、生かすも殺すも自由にできるらしいですぞ」

「よし。みんな返す。ここへはもう来ない。それで良いだろ」

よろよろ立ち上がりながら話す。

「あたしもべつに恨みはないし、悪いことしなければ友達だわ」

「そうだ。友達だ。じゃーな。もう会わないと思うが」

寿命も平均して五日なら同じ場所へ何回も来る暇はないみたい。

だから、こうしている時間も貴重なわけで、怪我をした男もいたわりながら歩いて行く。

さて残された三人の女の子。畏れにも似た感情が表情に出ている。

「あの。あたしアリサっていうの。近くに住んでんのだけれど、よろしくね」

「ああ。許してください」

恐怖で声が震えているが、ふと見上げる。残りの二人もアリサの後ろを見て、目を大きくさせる。なにものかがいる。

振り返ると、空から降りてくる飛行籠。エンジン音を響かせると近くへ着いた。三人の女の子はなにか囁きあうが、アリサには聞けないし、いま到着した人物に文句もいいたい。ヘルメットを脱ぎ

ボンベの管を吸う翔太に大声で言う。

「なにしてんのよ。大変だったんだから」

「搜したんだぜ。こんな近くで、それに草の間にいるから見つかりにくいんだよ」

「いいわけだー、そんなの」

「やはり、おれがいないとだめか、アリサちゃん」

それには焦る。頼りにしているとか、甘い顔なんて出来ない、恥ずかしいのねなんとなく。

「友達も一杯できたもんね。こちらが」

紹介しようとして三人の名前は知らないのに気付く。それでも三人は翔太の前に跪く。

「星の人様でございますね。お目にかかれて光栄です。おお。助けていただきありがとうございます」

やっとアリサに感謝するのに気付いたらしい。星の人、なんていうけれど記憶に昔交流があったのも刷り込まれてるのね。だいぶ薄れた記憶が現実を見て蘇ったということ。

しかし翔太も頬や顎を搔いてはボンベの管をくわえるではさまにならない。

「小屋にも一緒に行かなければ、でもゆっくりできないぜ」

「いいわよ、一人で生きていけるもんね」

「じゃ。行こう。二人乗りはきついけど」

「歩いて行くわ、近いし」

その会話に勇気を出して女の子が話す。

「恐れながらお願いがございます。助けたお礼をさせてください。村長に会っていただけないでしょうか」

集落を作っているのは確かだろう。そこでアリサは考える。あの小屋で一人になるより多くの友達といたほうが良いのではないかと。

「あたしは友達を作りたいんだ。お礼なんてさ、いいから。案内して」

「知らないところだぜ」

心配する翔太だけれど、どこでも一緒の気がする。あの小屋あたりだとまた無精ひげの男が来るかも。

「みんなと一緒に安全よ。父はそう思ってるから」

「しかたないか」

翔太もボンベのメーターを気にし始めているし、ここで一番危ない状況なのは彼だったりする。

「星の娘様。ありがとうございます。案内させていただきます」

三人は籠を持つと前になり歩き始める。

4話 了

5話 アリサは魔術師？

ススキ屋根の家に囲まれた広場へ黒く焦げた小石が盛り上がる。

火はあるみたいだね。テラスのあるのが村長の家らしい。テラスに待たされるとすぐに皺だらけの村長が現われて、対面した形で座る。

「星の娘様。接待のしかたもわからない田舎物だが許してください」

「これで充分だわ。みんなはいないの」

「仕事でございます。合図したから、じきにご馳走の準備もとの
いましょう」

言うのと改めて助けてくれた礼をする。

「それより、あの人たちは自分のところでは働かないのかな」

「楽したがる者もありますが、土地を奪われて村を襲って食べ物に
手に入れるしかないのでございます」

「どこかに住めばいいのにね」

「多分畑にもならない土地へ追いやられたのでございましょう」

「どんな人たちの」

「さあ。海の民としか噂に聞きません。海からユーフラテス川を伝
つてあつちこつちに現われるようでございます」

ユーフラテス川、どこかで聞いたような気もするでしょ。あのね、
最初のころ地名は地球にある名前をつけちゃったの。それでオティ
ヒもそのままそれを受け継いでいると。そう、言葉からして、もろ
地球の影響は受けちゃってる。だからそれ以上は関わらないで置こ
うと決めてあるわけ。

さて、一番に駆け込んできた女は真剣な顔で村長に言う。

「星の娘様へはありがたいことですが、山神様へのお供えの時期で
ございます。足りまずでしょうか」

余分な蓄えはない時代なのね。

「山神様は多くをお下がりくださる、ありがたいことだ。決まり通
り世話女を捧げるだけでもお怒りになるまい」

「ええっ。なんて！」

アリサは女を捧げる意味が飲み込めないけれど、食べ物と同じレベルで話す問題ではないと感じる。

「お怒りなされましたか。習慣なのです」

約一週間ごだから、オティヒの生きてる間に一度有るか無いかの行事らしい。女の子が一人犠牲となつて山神のところへ連れて行かれるという話。

「神なんていないわ。なにかおかしいよね。私は食べ物なんていないから。その山なんとかに上げてちょうだい。その代わり女の子は諦めさせてくれない。捧げるなんて人権蹂躪だわ」

「それが、どうやら目当ては女のように。その代わりにほかの女は安心して働けると言われております」

「迷信よ。今日も連れて行かれそうだったじゃない」

「こればかりは、山神様へお祈り申し上げませんと」

そのためにも食べ物と女を供えるらしい。アリサは納得できないし、星の娘としてちゃんと真相を突き止めたくなっちゃった。困った子だね。

「私が、その女の子になろうじゃないの。どうせママが来るまで暇だし」

困ったのは村長と一緒にいる女。顔を合わせて小さく問答する。それでも、同じ集落から差し出すより心は痛まない。またアリサも希望している。

「私は、そのやまがみさまがなにもか正体を調べるため導かれたのよ、きっと」

テレビで見たファンタジーを真似てみる。それに、気にしていた村長もアリサが現われた理由を示された思いらしい。

「ありがたいことで。それならなおさらご馳走を準備させていただきます」

わけのわからないまま、どうなるんでしょう。

アリサは村長とゆっくり話すことになるのだけれど、見かけは年

寄りでも産まれたのは六日か七日ぐらい前と思う。オティヒとしてはもう老人だね。

「カデシュの戦いではわしも活躍した。村の誇りじゃ」

えっとね、アリサも惑星管理局でなかば遊んでる状況だったけど、ヒタイツとイジプトの間で戦争があつたのは聞かされてる。へんな国の名前だけれど、地球の言葉がそのまま発音されてるとは限らないしね。カデシュってどこかで聞いた気がするよね。

彼が自慢するうちにも大きな鍋がさっきの石の上に置かれる。鉄ではないよ、青銅器ってやつ。まだ多くは出回ってないらしく、王様からのいただきものと村長は説明する。

「石を焼いて溶ける物質を発見した。それを加工している」

鉾石から胴が分離するのに気付いて鍋や道具に役立てるまでは幾世代も経てるはず。とくに寿命の短い彼らはかなり頭が良いのか、先祖の記憶をちゃんと引き継いでいる。

鍋に水が入られて中心地のハトウシャで仕入れた魚と鳥の肉が煮込まれる。

「近くのアシウルという町で買い物もしたいが、王様と仲も悪いみたいなのでな」

また戦が起こると心配する。手柄話とは裏腹に歓迎したくないことみたい。

村長の話でこの世界のことなんてなくわかったアリサだけれど、惑星管理局で遠くから眺めていたより平和でもないし、彼らがのんびり短い命を楽しんでいるわけでもないらしい。父の記憶のころから文化は発展したけれ慌しい世の中になっている。

石芋の葉も鍋に入れるけれど、芋はそのまま食べるみたい。石みたいにかたい意味じゃなくて、岩にも根を張り芋をつけるから石芋と、地球人が名づけた。土の中でもなかば頭を出す形で大きさの予想もつくし、栽培しやすい植物で、葉もあわせると、これだけで充分生きて行けるのね。

スライスされた芋をほおばるとせんべいみたいで、噛むにしたが

い甘くとろけるふうになってくる。包丁は青銅器でもなくなにかの尖った破片を持ちやすくしている。貝殻とか原始時代の名残なんでしょうね。地球の紀元前千二百年も地域の差があるけれど、こんな感じだったのかしら。

さて、アリサにはひと仕事待っている。自称、かみ、に会って村人から食べ物をくすねる真意を聞きたい。女を連れて行くなど、さっきの男たちと同じように感じている。父の記憶が許さないし、母の記憶もなにかすべきと訴えている。

5話 了

6話 魔剣士エラマとの戦い

村外れの岩山に洞窟があり、その前に果物や芋、まだ生の渡り鳥の肉が置かれた。アリサは恒例の行事にのっとり洞窟の中へ入る。

「あれ。ドアがある」

この世界に似合わないアルミ製。地球人がいるのか。あの無精ひげの男か、それともほかにもいるの。

「私はすべてお見通しだ。その取っ手をまわして入りなさい」

中から声がする。覗き窓があるらしい。ここで呑気なアリサは深く考えない。どうやら地球人にまた会えるとむしろ楽しく思う。ノブをまわして開ける。

天井からの明かりは弱いが円い発光体に見覚えもある、太陽電池式ライトじゃん。椅子みたいなのに座る人影が立ち上がりしばらく動かないでいる。

目が暗闇になれたアリサは相手の姿形を確認できた。なんだ、無精ひげの男。ひねりのない展開だけれど、なにか聞けそう。

「あなたが、かみ、てものなの」

「まさかと思っただかくるとはな」

彼も驚きから平常心を取り戻して、なにか予想もしていた口調。

「良かったよね。咬まれて痛かった」

ほかに話はあるでしょ、と言いたいけれどまず心配するのが彼女なのね。

「まあ。なんだ。座ってくれ。これもなにかの縁だろう。もうへんなことはしない」

「外の食べ物、持ってこようか」

「置いてたら村人がお下がりとしてもらって行くさ。おれもそんなに悪者ではない」

「ひとさらいが良いことなの」

「見てくれ。ここでの生活は彼らにとって夢みたいなものだ。おれ

も世話をしてくれる女が欲しいし、それだけの贅沢もさせている」
彼にも彼の都合と理論があるみたいだけれど、アリサにはわからないし、止めさせるのが目的だったよね。とりあえず近くの椅子に座る。

彼も地球人とは会いたかったらしく饒舌になる。オティヒが文化を發展させて行く過程をみていた彼も傍観者ではられないようなことを言う。

「ここに住んでるんだから、どうしても関わりあう。そのやり方も普通には付き合えないだろ」

かみ、とか特別な存在として認めてもらうしかない。

「でも良くないよ。友達とも別れちゃうし寂しいよ女の子が」

「いままで長いので十一日いた。はかない命だよ。おれは地球のことを話したり、この星の遠い場所の出来事も教えた。そうするうちに老衰してしまうのさ。決して悪い人生じゃないと思う」

彼自身が寂しいのだろう。それでも、女をここに呼ばなくても自分から出かければ良いと思うアリサ。

「村人と暮らしたら、べつに世話するとかでひとさらいなんてしないで良いじゃん。地球人の知識でいくらでも役にたてると思う」

それに彼は首を振る。

「おれもこのこと関わりすぎたのだ。女手がどうしても必要なんだよ」

「なにをするのよ。私が来てしまっただけに迷惑なの」

「協力してくれるならありがたい。それにオティヒの女を連れてくる必要もない」

それはアリサにとって目的を果たしたことにもなる。

「ママが帰ってくるまで暇だし、手伝ってあげる」

なにをするのか深くは考えないし、友達との思いがあるのも確かなのね。

「案内しよう」

彼が立ち上がり部屋の奥に歩く。追うアリサ。階段があり、上の出口は明るい。眩しい陽の射す外に出ると傾斜した岩肌をつる草が

這う。草と低木が茂る中に人影が動く。

「エラマだよ。おれの娘だ」

「子供が居るんだね、お母さんは」

「オテイヒだからな。とつくに死んださ」

それで女を連れてきて世話をさせているという。でも、一人でもできるふうにも見える。

「友達を捜してたんだね」

そのあたりで彼の思いはわかる気がした。

「それでもいいか。話してみないか」

彼も二人を引き合わせることでなにかを考えているらしい。声をかけると跳んでくるエラマ。跳躍力が半端じゃない。

「あなたが新しい人」

エラマはあまり嬉しくもない顔と口調で両腕を胸の前で組む。うんとね、彼女はやはり子供というには成長しすぎているのよ。アリサより背丈もありそうだし、胸の膨らみ方はおとなにもめったにいないほど豊かなの。くるくる巻いた長い髪がふわふわと頭のうしろで風に揺れる。服も肩紐なしの荒く編まれたライトイエローのタンクトップ。太腿あたりまであるのだけれど腰にベルトが巻かれて、なにか下げている。

「私はアリサよ。友達になろうよ」

腰にさげた長いのは護身用の剣だとアリサは感じた。

「友達とは、甘いわね。私に勝てたら友達にしてあげる」

彼女が剣を抜く。金色に光り曲線を描く剣は長さ一メートルほど。青銅を叩き薄くした鋭い刃がついている。

「翔太と遊んだことがあるよ。顔と頭は打っちゃだめだよ」

「ええい。規則なんかいいの。あなたが勝てばなんでも言うことをきいてやる。そのかわり私がかてば、奴隷にしてあげる」

なにやら大変なことになったけれど、アリサには遊び以外の真剣勝負なんて経験もないのね。

「私も使っているの」

バレッタを髪から外して、護身用剣で構える。いまは虹なんてでこない。

「こんなので戦えるの。最初から頭を下げて謝ればいいものを。私を怒らせたわね」

エラマとしては自分に恐れてひれ伏すのを予想していたのね。だから思うとおり行かないのに腹もたつた、と。

「じゃさ。三回勝負でいい。私からいくよ」

呑気なアリサは悪戯っぽく笑って相手の足元に腕を伸ばして剣で叩こうとした。跳躍して逃れるエラマ。剣でアリサの胴体に切りつける。

反射神経はよくないアリサだけれど、ピンキーが相手の剣に巻きつく。素早い蛇だね。それでも胴体を打たれてふら付く。

「負けちゃった。今度は勝つわよ。エラマちゃんから打ってきて」

「なにを遊んで。くつ。なんだ」

絡んだ蛇と格闘している。

「咬むから気をつけてね」

「もう、ほんとに怒った」

剣を高々と上げる。

「神と魔女の間に生まれしわれに力を」

唱えると黄金の光が濃くなり、七色の光を撒き散らす。うんとね、これは虹の色じゃないみたい。濃い紫や茶色系統とか黒っぽいのね。たまらず逃げるピンキー。薄暗くなった中でライトイエローのタングトップが映える。

「すべて暗くしてあげる。受けるといい」

振り下ろされる剣から黒い虹の束が舞いアリサを襲う。

「えっ。どうしたの」

あたりが真っ暗闇になる。結界に包まれてしまったのね。

「手も足も出まい。懲らしめてあげる」

声がすると後ろから護身用剣を取ろうとするみたいに引つ張られる。

「ちょっと、相手のアイテムを取るのはルール違反だよ」

両手で掴み剣をバレッタに納める。勢いでエラマの指がプレスレツトへ触れる。

「え、え、え、な、な」

彼女の声がぶるぶる震え、弾かれるように跳ねると、闇が消える。屍餅をついたエラマがなにかを怖がっている。

「あなたもへんな力を持っているわね。私の邪魔はさせないから」

アリサも低周波電磁発生装置のせいだと気付くには状況をまだ把握していない。

「なにが邪魔なの。これで一対一だわ。こんどは私から。うん、最後の先手はじゃんけんで決めようか、翔太もそうしてたし」

「ふふふ。そうか」

なにかに気付いたらしく含み笑いで話す。

「アリサとやら。己の能力をまだ悟らぬか。おもしろい。私と組もう」

「友達になるの。うん。なにかして遊ぶの」

「そうさ。二人で力を合わせれば、この世界を思うように操れる」

「楽しいの。もっと友達ができたら嬉しいな」

「友達か。所詮短い命のものに情など湧くまい。お互い殺しあわせて楽しむのさ」

「殺すって、相手が死ぬことだと聞いたよ。どうなるの」

「おもしろい。アリサとやら、死ねば魂が残る。その怨念こそ私の生きる証。殺して殺して、魂を奴隷にするのさ」

「よくわからないけど。楽しいことじゃないみたいね」

エラマは少女にしては大人びた顔で鼻筋も通り、大きな目に薄いけれど形の良い大きな口元。それを歪めて笑いながら喋るのに楽しい気分とも思えない。

「ふんつ。他人の不幸が私の幸せだ。アリサはどうか」

「みんなが楽しく友達になれたら良いと思うし、エラマちゃんが可愛そう」

「同情はいらないわ。じゃっ。敵だね。いまのうち処理しておくか」
「処理つてなに」

「殺してあげる」

剣を高々と上げるとアリサの頭に振り下ろす。

「翔太と同じことするね」

ぐいっとエラマに密着したアリサ。懷に潜り込んだ形になり、剣は宙をおよぐ。

「こらっ。放せつつうーの」

またびりびりするのを恐れたか必死にもがく。

「今度はあいこだね。抱きついたら引き分けなんだよ」

こんどはブレスレットの棘も肌に刺さらなかったみたいで、電気も走らないのね。

「なにを。遊んでるのか」

「遊んでくれるのでしょ」

まったく、こう温度差のある戦いもめったにないよね。

さて。二人のなりゆきを眺めている無精ひげの男。気配を感じて空を見上げる。翼を広げたのが近づく。

「エラマ。引き上げるぞ。地球人だ」

「臆病なんだから」

文句をたれながらもアリサに、今日は引き分けだ、と勝手に決める。アリサとしても遊びは一勝一敗の引き分けと納得できる。

「きつと翔太だよ。友達なんだ、挨拶しようよ」

「勝手にしな。この世界の魂を操り、地球とか言う星も支配してやるのさ。いまのところはまだ力不足だから表に出るわけに行かないのよ」

言つと髪を躍らせて草むらへ消える。無精ひげの男も洞穴へ戻つたらしいが、入り口が閉ざされている。

ま、良い。アリサは翔太がなんの用事でさまよいきたか知りたい。大きく手を振る。

へんな展開になったね。これじゃえすえふじゃないと思うけれど、

ほかの星のことだから、有り得るかも。

オティヒがこの星に生存しているとわかったころは集団もまばらで生えている草や木の実を食べていたという。それから道具を使うことを始めたのが十年前。五年前から石芋やほかの食物の栽培、動物の飼育もやりだした。のんびりしてたけれどね彼らの生活も。

人間の三千六百五十分の一しか寿命のないオティヒは道具と余計な知識を得て、人間が成した三千六百五十倍の速度で社会を進化させる。こんなことも異星人だからできるのだよね。

6話 了

7部 ファーストキス

翔太は一度戻り、それから小屋で待つてたらしい。飛行籠から降りると酸素ボンベを吸いながら、安心したようで困った顔。

「村にもいないし、心配したんだぜ」

「うんとね。友達と遊んでたの。エラマちゃんって同じ地球人とオティヒの子供だよ」

「あの男だな。あまり良い人でもなさそうだが」

「なんか知らないけど、かみ、と呼ばせてるの。私は悪いことしないようにお願いにきたんだけど」

翔太もアリサの性格はわかるつもりだけれど、説明も欲しいはずだよ。

村長に会ってここへ来た事情を話すと翔太も腕を組んで考える。

「剣から虹が出るなんてファンタジーじゃないか。いや、待てよ。この星にはへんなのが多いから」

アリサの腰に巻きつくピンクへ視線が行く。

「ピンクちゃんはおかしくないよ」

「アリサちゃんがずっとこの星の生物しか見てないからだよ。あきらかに相手の何かを感じ取って行動している。見えないエネルギーが充満していて、形にしやすいのかもしれない」

「わかんないけど、それはええふなの」

「現実には経験したんだろ」

さすが翔太は理解してくれる。だけれど、甘い顔なんてしないし、ここにも慣れたと思うアリサ。

「村の人たちもいい人だよ。翔太は心配しなくて良いの。地球人には住めないし、おとなしく局に戻ったほうが良いわ」

「小屋もせっかく掃除してきたんだぜ」

「お節介だっちゅうの。そうだ、まだ話の途中だった。ちゃんと話さなきゃ」

無精ひげの男から、もう人さらいはしないとはつきり聞きたいのね。それでも、階段へ降りるところは閉まっている。

「ここは高台になってるしさ」

下の村へ行くには遠回りしなければならないと、翔太はアリサの次の行動を読んでいるのね。

「その道もわかる、と。じゃー、案内してくれるんでしょうね」

「小屋の前を通るんだ。そこからはすぐ村へ行ける」

「ちゃんとお掃除したの」

うんとね。もう二人は歩きながら喋ってるの。飛行籠が置いたままなのは気になるけれど、操縦できるのはいない、違うな。無精ひげの男がいじらなければ良いのだけれどと思うでしょ。でも、二人は久しぶりに会った気がして話も弾む。おいおい、まだ別れて半日もたつてないよね。

そんなわけで小屋の前。ちゃんとドアは閉めてあるけれど、翔太が開ける。狭い部屋には奥にベッド。簡単に調理出来る洗い場と簡易トイレのあるらしい小部屋。わりと綺麗に片付いている。

「空気洗浄器も置いたから、安心だよ」

言いながらベッドの縁に座る。ここならボンベから忙しく吸うこともないみたい。

「テレビはないの」

隣へ腰かけるアリサ。通信用人口惑星から送られる電波はアリサの楽しみでもあったから、落ち着くと見てみたい。

「こんど来るときに準備するよ。だから、あまり外に行かないでくれよ」

「なぜ。友達もいるし、もつといっぱい友達を作りたいの」

「心配なんだよ。ここも平和じゃない。上から見ると、また戦争が起こりそうなんだ。巻き込まれたら怪我だけじゃすまなくなる」

「ふーん。もつと痛い」

「つまりだな。アリサちゃんはママと別れて寂しくないかな」

「平気だもんね。なによ、関係ないでしょ」

まったく。忘れようとしてるのに思いださせて哀しませる、鈍感男だよな。

「だろ。でも、いつか会える。しかし、死んじやうともう一生会えないのだよ」

「会えるもん。ママは帰ってくるって約束したんだから」

「だから、さ。待てるんじゃないか。ここでアリサちゃんが無茶をして死んでしまったらママが哀しむよ」

「私も死ぬの」

「いつかはな。でも今じゃない。おれもここへ遊びにくるから、この世界の争いに巻き込まれるようなことはしないで欲しい」

「お願いされたら断れないよね。でも、村長さんとの約束はちゃんと守らなければ気がすまないの」

彼が心配してくれているのに感謝するし、少し目頭も熱くなる。

彼がいてくれる、それはアリサにみような満足感を覚えさせる。

「しかし。そのエラマって子は危ないよ。友達するのは仕方ないが、もう関わりあうのは止めたほうがいい」

「楽しかったよ。翔太とした遊びも知ってたし、ピンキーちゃんとも遊んでた」

ちよつと違うだろ、と言いたい。

「そうだな。もしかしてピンキーちゃんたちがこの星で一番進化した生物かもしれない」

「頭が良いんだ」

「それだけじゃない気もするんだが」

翔太が舌を鳴らすとピンキーはアリサの腰から抜けてくる。

「ウム大陸に生息しているが、調査も半端になってしまったな」

地球ではほかの惑星へ構ってる状況じゃないらしい。主任たちも最後になにか形を残して地球へ戻りたいようだし、それにはアリサを標本として持ち帰るという選択肢が重要でもある。

「返してよ。スカートがごわごわするじゃない」

ベルトのないスカートは少し締め付けも緩い。

「ピンキーちゃんに言っでござん」

翔太が腕に絡ませて、もたげる蛇の頭を撫でながら立ち上がる。

「ピンキーちゃん戻っておいで」

アリサが呼ぶのも聞こえないみたい。というか、言葉を理解してないのね。ただ、感じるだけなのよ。こうなると実力行使。アリサも立ち上がりピンキーへ手を伸ばす。だけれど、簡単に譲る翔太でもない。ほらほらと後ろへ逃げる。

「弱点はしってんだから」

方針を変えて、彼の腹へ腕を伸ばして、こちょこちょくすぐる。

「うひゃ。やめてくれ」

身体をもそもぞさせながら両手でアリサの手を退けようとする。

ピンキーもこの騒ぎに紛れてアリサの腕に移り、にやりによると背中に隠れる。

「勝ったもんね」

「まだまだ。尻尾を掴んでるよ」

翔太がピンキーの尻尾をたぐりよせるけれど、にゅっと反対から顔を見せて赤い舌をちよろちよろさせる蛇。

「咬め。咬め」

アリサに言われても聞くピンキーではないみたい。

「アリサちゃんはおれが連れてきたのを忘れたな。本当の飼い主を知ってるのだよ」

「こうなれば奥の手だわ」

彼の背中に掌を置き、ブレスレットを当てる。

「ば、ばか」

彼はびりびりと身体が震える。でもさ、いまの状況はどうなってるの。抱き合ってる形で身体も触れている。そうなるとアリサもびりびりが伝わるのね。

「うわっ。びつくりした」

掌を引き剥がす。ピンキーはどさくさに紛れてどこかへ行ったらしい。

「状況を考えて使えよな」

「だって、翔太が悪いんだから」

「ほらピンキーが逃げちゃったじゃん。引き分けた」

「うん。仕方ないわね」

遊びの判定をするのもいいけれど、いつまで抱き合ってるのかしらね。アリサとしてはなぜか物凄く安心する思いだし、彼としては断られるまで、このままで居たいのよ。

「ほんと、心配だよ。なぜかわかるかい」

「友達だからでしょ」

「もつと。なんというか。アリサちゃん。おれさ。好きなんだ」

「あたしも好きだよ。翔太はなぜいまさらそんな話をするの」

告白されても恋なんて感情がなにか知らないアリサ。

「お母さんの記憶でわからないかなー。ちゃんと恋人にしたいんだ、アリサちゃんを」

「こいびと。えっちもするんでしょ」

「アリサちゃんはいやなのか」

「わかんないけど。翔太がぜひにお願いしたら。でも、やり方も知らないし」

「大丈夫だよ。生き物は自然に愛し合えるようになってるから」

「ふううん、そうなの。じゃーさ。その、こいびとつてのにあたしがなれば、えっちするの」

「愛してる」

彼が強く抱きしめる。

「好き、だよ。翔太」

顔を上げるアリサ。なんだ、妖しい雰囲気になって来た。

「良いんだね」

「うん」

みように素直なアリサ。背伸びをすれば、彼が顔を近づける。唇が軽く触れあい、なにやらじんじんと身体がしてくる。ちゅっ、音を響かせて吸いあうけれど、それじゃ物足りないらしく彼は彼女の

背中を抱き上げて、思い切り唇に吸い付く。

7話了

8話 歌と友情のスイートレディーズ登場

そんなわけで恋人にはなつたけれど、翔太もここで暮らすには仕事もあるし、ずっとこの大気の中にもできないのね。村長には明日の朝会いに行くことにして、あたりも暗くなつたから眠る。でもさ、すぐに睡魔が訪れるわけもないし、今日は色々ありすぎた。それに、一人で小屋に寝るなんて考えるだけで怖いよね。だから翔太のことを考えてうつぶせになる。

あのさ、寝巻きとか下着は持つてなかったよね。お節介翔太がちゃんと持つてきていたけれど恥ずかしいから、置いてたら、と突けはなしたけれどありがたいこと、と心で感謝している。超速乾性形状保持繊維ソフトタイプだから二枚あれば充分なのよ。ちなみにアリサの着けてる服も、それ。だからブラウスとスカートはずつとそのままでも汚れや皺が自然になくなって行く、そういう時代ではあるんだよ地球は。

まどろみのなかで外が騒がしい。蔓に覆うわれたガラス窓から月明かりがやけに明るいのよ。

「三番目の月も出たんだわ。じよじよに夜がなくなるってママは言つてたけど」

闇の中でおとなしく眠るオティヒたちが短い命を惜しんで活動すると主任たちはみているらしいのね。

ノックの音がして眠気も吹っ飛ぶ。まずそういう習慣を持つているのは地球人だよ。この世界にこういうドアなんてないはずだし、認識しないと思う。

（エラマちゃんが遊びにきたのかな。でもおうちは教えてないよね）
心で呟く。いくら呑気なアリサでもドアを開けるのは躊躇する。
しかし、外で音楽は鳴り出して、夢がなんとか歌い始める。一人ではないらしいのね。怖さより興味のほうが強いアリサ。ドアを開ける。

空には西に傾く半欠けの小振りな月。真上にはちいちゃいけれど
明るく円い月。そして東から大きな三日月がオレンジ色の全身を現
している。だから顔も判断できるほど明るいよ。

「らーららー、とかハモる三人の女の子。」

「やはり人のおうちだわ」

アリサに気付いて、近づくのは目がきらきらと輝く女の子。まだ
若そうだし、服からして地球人なのね。

うんとね、三人ともお揃いの服なんだけど、ミニスカートで派
手にリボンのついたブラウス。

「一応私のうちなんですけど。夜中になにしてんの」

「歌の練習よ。そしたら。あわわわって感じてここにいるの。なぜ」
「それを知りたいんですけど」

アリサとしても状況の説明を聞きたいのだけれど、三人娘もわか
らないうちにここへ来たと。なぜでしょうね。えすえふにはたまに
あるけど、現実には起こるとはね。

「異世界へ紛れ込んだんだわ」

冷静に言うのは顔立ちも整った女の子。彼女は説明する。

「私たちの歌が時間と空間を歪めたのよ。できるかも、伝説のキャ
ンディーズに追いつけるわよ」

個人的には余計わからなくなるアリサ。

「ともかく外じゃ、物騒なのもありますから中へ」

落ち着いて話も聞きたいし、また友達ができることを喜んでもい
る。

「月が。月がみつっあるー」

あと一人いた女の子が興奮して怯えるように空を見渡して言いな
がら両手で顔を覆う。

「タツちゃん。あれはスイートレディーズの星なんだわ。大丈夫」
美人娘が駆けつけて肩に手を置けば、最初の女の子が二人の前に
立つ。

「負けないわ。この世界でビッグスターになるのよ。ヨッちゃん、

フウちゃん。元気を出して」

「イツちゃん」

二人が声を合わせて言う顔を上げて、三人は右手を高々とあげてつなぐ。

「歌と友情のスイートレディーズ」

声を合わせてなにか宣言する。

「あの。色々聞きたいけど。まずは中へ」

いつまでも三人の世界を作っていられたりますますわからなくなる。

音楽が出ていた箱型録音再生機を押して部屋に運びいれる。カラオケみたいだけれど、もっと専門的らしい。きゆるきゆるとキヤスターが軋む。うちでも練習するために持ち歩いているみたいだけれど、重そうだよ。

えつとですね。アリサが彼女たちをベッドの縁に座らせて聞いた話を要約してみましょう。彼女たちははるか昔、二十一世紀初期の人間で、三人はスイートレディーズと名乗る歌手活動を始めたばかりなのね。目標は、二十世紀というからアリサにも伝説の時代だけれど、キャンディーズと呼ばれたアイドルともスーパーマルチャレントとも形容される三人娘がいたらしいのよ。それを目標にイツちゃんの率いるグループは結成されたみたい。

練習に励んだるときになぜかまわりが揺れて気がついたら月明かりの外にいたと。それでアリサの小屋をノックしたんだね。

呼び合ってたから名前はわかるけれど、改めて自己紹介する。アリサも、ここは地球じゃないと、オティヒのことなどを聞かせる。

「地球には戻れないんだわ。宇宙を渡るなんて無理よ」

ヨツちゃんが両手を顔に当てる。少しふくよかで可愛い顔をしてるけれど、泣き虫さんらしい。

「時間と空間を越えてここへ来たんじゃないの。諦めは禁物よ。大丈夫」

ふうちゃんが肩に手をやる。なんだ、つぎのパターンも予測つく。

案の定、立ち上がり二人の前に立つイツちゃん。

「負けないわ、異世界なんかに。練習したのを、いま試すとき。元氣を出して」

「イツちゃん」

あと二人も立ち上がり右手を上げて、さっきしたのを始める。

「歌か。聞かせてくれない」

アリサは眠気もさめたし、このふうがわりな友達のことをもっと知るには歌を聴くのが一番と思うのよね。

「持ち歌はまだないですけど。練習してるから」

イツちゃんが言うと三人は箱型録音再生機を操作する。そういうわけで、小屋は四人の女の子でベッドも狭いけれど、遅くまでステージになっちゃった。

8話 了

9話 戦争を知らない少女たち

んでもって朝。アリサは村長に会いに行かねばならない。

「みんなも行かない。美味しいのもあるよ」

「振り付けの練習だわ。ヨツちゃん、フウちゃん。行くよ」

イツちゃんが言うのと石ころを避けて草の上で横並びに立つ。

「昼にはお土産でも持ってくるから。翔太って男の人が来たら、昼ごろ来るように言ってくれない」

「アリサちゃんの彼氏なんだ。良いな」

フウちゃんが羨ましがるけれど、みんなと友達になってくれたら嬉しいと思うアリサ。

「みんなとも仲良くなれると思うよ。テレビを持ってきたら自由に見ていいから」

すでに同居人として一蓮托生の考えなんだから、持ち物は共有するのも当然でしょ。

さて。程なく歩くとススキ林あたりからうじゃうじゃオティヒたちが出てくる。男だけで、見るからに怖い形相をしている。

「変なのがいるぞ」

「敵じゃない。アシユルの連中をやっつけるのが先だ」

アシユルの町なら近くにあると聞いているアリサ。仲が悪いと村長は話していたが、戦争は始まったのかな。

「喧嘩しに行くの。話し合って仲良くやれば良いのに」

「こつちがそう思ってもあつちから来るんだよ。そろそろ近くに來ているはず。君も戦うなら着いてこい」

「そうじゃないけど」

「じゃあ、どこか隠れているんだな。今度は殺し合いになるぜ」

避難していたほうが無難と思うけれど、小屋の前に友達がいるのも忘れてないのよ。走るアリサ。

小屋の前で呑気に手を振りなにか歌っている三人へ大声で喋る。

「喧嘩だよー。小屋の中へ入って」

しかし、音楽も大きくて、アリサの声は聞こえないみたいなの。急いで前まで来ると、なにごと、という顔で音楽を止める。

「大勢で喧嘩が始まるの。中へ」

話してる途中で石が飛び交い、男らの嬌声が轟く。鉢合わせしたふたつのグループが飛び道具で応酬して、彼女たちの近くまで飛んでくるのね。

カラオケを急いで片付けて三人が小屋に入るけれど、アリサは見てしまったのよ、空に浮かぶ黒い小さな雲が地面近くまで降りてくるのを。

「エラマちゃん」

声にしてしまう。

雲に包まれる形で意地悪笑いをしている少女はアリサに気付くと思いきり跳躍した。

エラマはアリサの前に立ちなにやら興奮している。

「やっと来たわね。でも遅いわ。時空を歪めて、いま、われらが怨霊たちは集結する。ここが戦場になるのよ」

「普通のオテイヒの男の方みたいよ。少しエキサイトしてるけど」
この呑気さはなんだ。戦争の意味を理解してないからでしょうね。それを余裕と勘違いするエラマもアリサと同じように生まれてまもない女の子かもしれないね。

「見よ。もはや人間ではない。私に操られて心は鬼となった愚かなものたちを」

指差すところは喧嘩している男たち。接近しすぎて飛び道具も効果がない。だけれど、腕と足がある。つかみ合い殴りつける。大砲とか剣もないし、ミサイルなんて考えつかない彼ら。拳を作りお互い殴ろうとかかるけれど、身をかわして相手の身体を掴む肉弾戦。

くんずほぐれつの中、鉢合わせた二人。

「ジョージではないか」

「リチャード。なぜ君が敵に」

「それより。なぜ争わないとならない」

「国同士が決めたことだ」

和やかな顔も使命感に燃えた表情にかわり相手の出方を窺う、こすっからい雰囲気。

ジョージの腕が伸びて相手の顔面を打つ。それを掴むリチャード。ぐいつ、と跳ね除けて、足蹴りで相手の腹を打つ。

お腹を打たれると内臓が圧迫されるし、喉から、ぐえつ、となるから、ために自分の拳で自分のお腹を強く叩いてごらん、責任はとれないけれど。

負けてはいないジョージ。リチャードの足を掴み引き倒す。上になり、相手の顔面を殴る。赤く腫れて黒ずむリチャードの顔だが闘志は衰えない。ぎらぎらした目が狂気を帯びて、突き上げる拳は相手の顎を突き上げる。

アッパークットつてもものだけれど経験ない人も多いと思う。顎が外れる思い。舌を噛んでしまったら死にますから気をつけてね。

体勢は入れ替わるけれど、ジョージも方針を変える。下になりながら両腕を伸ばしてリチャードの首を絞める。お互いで首を絞めあう。

息が出来ない状況は経験もあるんじゃないかな。かなり苦しいわいで、また首の骨は簡単に折れますから絶対真似しないようにね。

これじゃ爆弾でどかんと一発で終わらせたほうがいいと思うですよ。でも神経が麻痺して意識もなくなるまで時間がかかるし一生分痛いんだよ。試そうと思わないでね。

さてここは戦場、二人だけじゃないのね。石を手にした男が視点も定まらない目つきで駆け巡り、馬乗りになるリチャードの後頭部に打ち付ける。石は堅いし、ぎざぎざと尖がったりしている。じわっ、髪へ液体が滲み出る。赤い液体が首筋に流れてジョージの顔に

滴り落ちる。目玉を飛び出させたりチャードの身体が崩れ落ちる。

がしがしとリチャードの頭を打つ男はジョージも味方が敵かは判断できない。ただ異様な視線は彼をターゲットにして石を振りかざす。死体が上に居たんでは動けない。近づく男の顔面へ指を伸ばす。ぐりぐりと柔らかくふたつの眼球に指がめり込む。悲鳴を上げて石を放す男だけれど、ぐわしっ、ジョージの額に落ちて赤い血が目の流れで鼻筋を伝い唇を赤く染める。それでもまだ二人は生きている。もう痛いとかの感情はない、恐怖と生存願望だけが行動させる。

だから、戦争の建前なんてどうでもいいのね。骨を折り、血を流させて肉のかたまりが動かなくなるまで攻撃しないと自分がやられちゃうのよ戦争って。当然痛いわけで、どのような痛さかはわからないけれど、生きて戻っても癒えない傷と経験者は話しております。

さて。空に黒雲が湧き、異様な騒音は群がる人々の雄叫び。エラマは満足そうに笑う。

「来たか。時と空間を越えて怨霊たちがこの地上を支配するときだ」「大袈裟だよ。この喧嘩もやがて終わるし、また仲良くなるんだわ」「戦争のあとはバランスのとれた関係が続けると思うアリサ。あたりには変に腕を突き出したり足を曲げて硬直しているのが累々と散らばる。」

「いままでは愚かにも短い一生を建前で誤魔化しておった。しかし、欲望で生きる楽しみを教えるのだ」

「どのようにして」

問うアリサ。ちょっと主役として幼い感じだし、言い方もあるはずだけれど、可愛いからゆるしてね。

「怨霊が乗り移り好き勝手するのさ。そして私の僕となるのだ」

「ふうっん。つまり、おんれいさんってのは悪いことする人なの」

「ええい。人ではない」

エラマも調子が狂いばなしでとうとう怒ったみたい。

「本当は見えないの。存在してるけど、見えないし、なにも出来ないから恨みごとでも言いたいの。だから怨霊になるのよ。決してお礼とかしたいわけじゃないの」

「見えないのが見えるの。翔太も話してたけど、本当なんだ。凄いよ。友達になれるかな」。おんれいさんたちと

「うっとおしいわね。もういい」

エラマも少し考え違いしていたと気付く。自分の邪魔をするわけでもない判断した。

しかしここで小屋のドアが開く。おいおい邪魔だよと言いたいのだけれど、ヨツちゃんが前になり言う。弱虫だけでもないみたい。「話は聞いたよ。見えないのが見える。ここが私たちの舞台なんだわ」

フウちゃんが並ぶ。

「心に響く歌が形になるのよ。愛と友情を試すとき」
当然前に出るイツちゃん。

「荒れた心を癒せるのは歌だわ。おんれいさん。そしてこの世界のみなさん。スイートレディーズを聴いてください」

あんがい下手に話すが観客を相手にした思いだからでしょう。

9 話 了

10話 蘇る魂

暢気に歌ってる場合でもないし、エラマとしても雰囲気乱されっぱなしで機嫌がわるい。

「かつてに歌うと良いんだわ。しょせん、気休めさ」
言うと手を挙げて広げる。

「怨念を秘めたものたちよ、力を貸そう。われが怨霊とともに立ち上げ」

黒い霧が降り立ち、地面に倒れる男たちへ降り注ぐ。倒れていた者がふらつきながら立ち上がってきた。

血まみれの顔に笑みを浮かべて、低く笑う声が響く。
「生きてるんだー。良かった。早く傷の手当てをしないとね」

アリサは無邪気に喜び彼らに近づく。

「可愛い姉ちゃんじゃないか。遊んでもらいたいのか」

そんな元気があるのかわからないけれど、男の性ですかね。

「おれが先だぜ」

割り込んできた男は頭から血を滴らせている。

「リチャード。おれが先にみつけたんだぜ」

「なにおー。ジョージはおれの女を横取りしただろう。これはよこせ」

「力がすべてさ」

ふらつく身体ながら殴りかかる。相手もよろけながらかわす。

「あの。友達になるのは構わないけど、喧嘩する人は嫌いだよね」

仲裁に入りたいアリサだけれど、二人は聞いていない。苛立つのは当然エラマでしょ。

「ええーい。怨念をぶつける相手が違うでしょうが。このさい二人で可愛がるといい」

意地悪く笑うエラマ。しかし、もっと怒っているのがスイートレディーズなわけ。

「もおつ。聞きなさいつてばさ」

割り込んできたのはヨツちゃん。ふくよかな顔をもつと膨らませる。当然フウちゃんが隣に並ぶ。

「聞いてからでも遅くないでしょ。その可愛がるのは」

微笑をたたえる美少女には喧嘩した二人やほかの者も注目する。

可愛がるを単純に言葉通り理解してるのね、きっと。

いまがころあいとイツちゃんがマイクを三本持つてくる。ワイヤレスでカラオケの遠隔装置つきだ。

「いくよ。ヨツちゃん、フウちゃん」

威勢良く叫ぶと、のどかなりリズムが大音響で流れる。まず、この星の住人は始めて聞くでしょうし、脳天に響く。ただ立ち尽くすだけ。

らーらららー。ヨツちゃんが真ん中になり高々と歌いだす。

「音波攻撃とはやるわねー。しかし、いつまで続くかしら」

エラマは余裕の顔で眺める。

アリサもいまいましいと思う。小屋へ急いで戻ると、救急用バツクを手に提げて外へ急ぐ。

「みんなー。手当てしてあげるから」

まずは身近にいた二人だけど、どこから手をつけていいものか。ただ、この時代は便利なものがあるのね。消毒と鎮痛作用のある緊急プレーなら多めに揃えている。ま、心配した翔太の老婆心でしょうけれど。

しゅーしゅー、とかけると痛みが和らぎ血の流れも止まる。

「きみは。おう。思いだした空の民。なんということを」

「ジョージ。ほんとか。奇跡が目の前で」

喋るリチャードにもかけると、ちよつと染みて辛い顔をするがほかほかと緩んだ顔にかわる。

それを見ていた者も顔が和む。夢はいかがー、と歌に合わせてリズムを取ってアリサを待つ雰囲気。

エラマは戸惑う。怨念が薄れて行くのを感じている。

「よそのアイテムなんて卑怯よ」

「あるから使っでしよ。テレビゲームとは違っつーの」
アリサもいまは相手をしているときではない。

さて、歌い終わったスイートレディーズ。拍手のないのが物足りないけれど、状況に気付く。さっそくイツちゃんを先頭につける。

「もつとあるかしら。手伝うわ」

「あの袋に。これみたいなスプレーがあるから」

しゅーしゅー、と振りまきながら話す。そこへエラマが近づくけれど、手伝う気はないみたい。

「もおつたらー。なんでこんな展開になんのよ。こうなったら対決だわ。剣を取って」

言つと腰の魔剣を抜き上にかざす。

「遊んでるときじゃないけどねー。エラマちゃんは寂しいんだね。相手してあげる」

立ち上がり跳躍するけれど、メートルも跳んだかしら。ちょこちょこと小走りに群集から離れる。

エラマはひと跳びで前にきた。

「相手してあげるとは偉そうに言っわね。きょうはかみの邪魔もない。懲らしめてあげるから」

「この前は引き分けだったね。でもルールを決めないと」

「ええい。殺し合いに規則などない」

剣を前にして突きの構えで走る。しゃー、と摩擦音でピンキーちゃんが伸びて剣に絡むけれど、そのまま体当たりされてアリサが倒れる。

「危ないよねー。前を見ないからぶつかるんだよ」

半身起こして言う。剣はくるくるとピンキーと絡んで踊るようにしているけれど、エラマの手から落ちた。

「良いわ、喧嘩に武器なんていらないから」

両手を伸ばしてアリサの首に両手を伸ばすけれど、それを掴む。

うんしょ、うんしょ、と力を込める二人が横に転がりながら、相手の髪を掴んじやった。いつの時代も髪はつかみやすいのかしらね。

10話
了

11話 死ぬのは誰だ

髪はさ、束にして掴むより一本でも引つ張られたほうが痛いよね。パーマをかけるとき経験ないかなー。それで、エラマが掴んでた天頂部から指を解いてアリサの前髪を何本か指に絡めて引つ張る。

「いたった」

痛さに涙が湧くよね。手の力も緩む。優勢になったエラマ、立ち上がりアリサの上半身を引き起こす。というより、痛さを和らげようと自然に身体があとを追う。

「喧嘩は私が得意なんだから」

エラマが自慢げに言っていると、膝で腹を蹴りつける。

「うぐっ。ちよっ。んっ」

両手で相手の膝を遮って掴むけれど、至近距離でぼむぼむ打ち付ける。お腹を窪めて痛がるけれど、髪を引かれて顔は上に向く。そうなるとお腹を突き出して、もっと打ちなさいみたいな格好になってしまう。

「降参かしら。私に土下座して謝れば許してあげる」

身体を屈めて顔を合わせると提案するエラマ。息苦しく激しい息のアリサ。

「エラマちゃんの一勝ね。二回戦よ、放してちょうだい」

「えええーい。なにをのどかに喋っている。教えてあげる、あなたも怨霊となればいいのよ」

アリサの後ろへ腕を伸ばすとバレッタを引き抜いた。

「やっと手にいれた。自分の剣で死ねば本望だろう」

「それ、危ないんだよ。刃物は近くに人がいるとき使っちゃだめなの」

「死んでも、暢気に言っただけでられるかしら」

エラマはバレッタを弄る。やがて短剣が銀色に輝いて飛び出した。「命乞いをするならいまのうちだよ」

「いけないんだよ。自分の身を守る以外に使っちゃ。ママに言われてんのだけどな」

「またわからんことを」

エラマは思い切りアリサの腹を蹴飛ばすと押し倒す。

「もおつ。知らないから」

仰向けでため息を吐くアリサ。エラマが両手でバレッタ剣を持ってアリサの顔の前に突き出す。

「ひと思いに死なせてあげる。友達と言ってくれた情けだよ」

すすーと胸元へ刃先を下ろして行く。当然止めに入るのは身体の条件反射。

「エラマちゃんも友達と思ってるんだね。良かった」

相手の作る両手の拳を包むように掴む。あとは力比べだね、エラマが体重をかけて強く押してくる。アリサも刃物が胸に刺さって心臓が破れたら救急病院にでもすぐ行かないと死ぬのは理解している。

「本気なのね」

やっとエラマの気持ちに気付くというか、身の危険も感じた。ぎゅっと相手の拳を掴んで腕をぐいぐいと伸ばす。肘が地面についてるぶん力が入る。それ以上引き離すにはパワー不足だけれど、手首でちかちか光る。ぱちぱちと爆ぜる音が響き、目も眩むまばゆさで青白い稲妻が手首から向こうへ流れる。

「あうっ」

呻いて仰け反るエラマ。しかし、アリサも腕が痛み顔をしかめる。見ると肘の裏と手首の中間あたりから血が滲んでいる。バレッタ剣の刃が、当たったのだ。

「あわわわ。お薬はー」

見回すと救急袋が目についた。急いで開けるところヘイツちゃんが駆け寄る。

「どうしたの。ありゃー。やっちゃったか」

言っと、手にしたスプレーを吹き付ける。

「すんごい痛つかた。まだずきずきする。あれが胸に刺さったら、

痛さで死んじやうよ」

「遊んでると思ったら。かなり危ないゲームじゃないの」

「でも、ここににいる人たちはもつと痛かったんだよ。それでも殴って殴られて、普通じゃなくなるよね」

喧嘩に傍観者でしかなかったアリサだけれど、なんとなくわかった。エラマのいう怨霊はだれでもなれるはず。ゲームではなく本気の殺し合いを仕掛けてきたエラマだとはっきり感じた。それに応じたあの稲妻は自分の中に宿る怨念のたぐいが表面化したと思ったわけ。

それでエラマ。雷に打たれたようなものだけれど、仰向けに気絶している。バレッタ剣を奪い合って二人とも腕を伸ばしていたと、自然向こうにあるのは彼女の胸ですね。まともに心臓へ電流を流し込まれたということ。

普通生きてない。それが不自然に揺れてくにゆくにゆと上半身が起き上がる。

「よくもやったわね。でも聞くがいい。私は不死身だ」

大きな声はアリサにも届いた。エラマの口調に尊大なところがあるのは最初にも感じていたが、どこか違うようにも思えた。

「エラマちゃん。大丈夫だった。あんなことするから」

駆け寄るアリサ。イツちゃんもあとから追う。

「へんな友達だけど、危ないよ。ほら、ちよつとおかしい」

ぐつたりとした身体はまだ眠っているみたいに思える。それが立ち上がる。

「アリサ。不思議な術を使うらしいが、怨念を増やすだけだ。私はさらに憎悪エネルギーを得た。しよせん、ここは遊び。いまヒタイツの滅びを実行するとき」

「エラマちゃんはこの国が嫌いな。私も来て間もないからよくわかんないけど、いい人たちがいるよ」

「好き嫌いじゃない。もお。あんたとは話さないから」

ヒステリーを起こしてしまったみたい。そこへちよつかいをだす

イツちゃん。

「友達は大事だよ。喧嘩しても仲直りできるもん。ただ、危ない遊びは止めて欲しいの。そうしたら私たちも友達になるから」

「決めたもん。あなたたちとは話さないんだから」

「話してるし」

ヨツちゃんがイツちゃんの隣に来て言う。当然フウちゃんも一緒。「エラマちゃんだったね。一緒に歌を歌おうよ。ぜったい気持ちが癒されるから」

「おもしろい。やはり見立て違いだった」

言つと高々と笑う。そしてエラマの身体が崩れて横になり倒れる。それでも声がする。

「わが怨霊たちはもはやハトウシヤの町へ着いたところだ。アリサ、なにか邪魔すると思ったが根っからの能天気だな」

声はくぐもり消えて行く。見回すと黒い霧や雲は消え去り、白い雲が太陽を遮りながら風に流されて行く。

「あの。どういうことかな」

エラマに近づくアリサ。だけれど答えないし、ぐにやりと四肢を垂れさせている。

「大丈夫なの」

フウちゃんが近づき肩をちょいと揺すって起こし、心臓へ耳を当てる。

「生きてるかしら」

ヨツちゃんが震える声で訊く。みんなの心にもある思いで、返事を待つ。

「心臓は動いてるけど。あとはわかんないなー。ここはべつの星だし」

フウちゃんがそつとエラマから離れると言う。

「良かった。死んじゃったら。私」

アリサは涙ぐむ。少なくとも自分の放った雷に打たれたのだ、人殺しにはなりたくないよね。

「ここへ寝かせるわけに行かないでしょ」

「イッチャンがエラマの肩を持ちあげて自分の肩に乗せる。」

「重いでしょ」

アリサが片方を担ぎ、残る二人はカラオケを引つ張る。言わなくても行く先はひとつ、三人が住んでいる小屋だ。

どうしたんだと思うでしょ。見えないのが見える、あるいは強く感じられる世界なんだよね。エラマは自分自身が怨霊というか魔物に憑依されてるわけ。いまは、その魔物がお留守してるのね。それを部屋へ招き入れる。大丈夫かしらね。

11話 了

12話 魔界の妖鬼姫登場

ベッドへエラマを横たえると並んで見守るけれど、アリサは村長に会うことも忘れていないし、父親である、かみ、へ連絡すべきと感じた。

「エラマちゃんが起きたら、かみさんを呼んでくるからと伝えてね」「歌でも練習しておくから」

イツちゃんがさっそくカラオケのスイッチを入れる。うんとね、バッテリーで動いてるからコンセントは必要ないのよ。

「課題曲二番行きますか」

ヨツちゃんが華やいで言う。メインボーカルをつとめてるし、案外行動力はある。

「楽しみだね。昨日ちよつと歌った、あなたが大好きって歌でしょ」「そういえば翔太も来るころか、と思いながらドアのほうへ歩く。けれど、ドアどころか壁もないじゃん。」

「エラマちゃん」

黒い霧みたいのが立ち込めちゃってるし、彼女のアイテムと心得ている。振り返るとベッドの上で仁王立ちのエラマ。ガラス窓を背にしてへんに輝く。

「わざわざ密室へ招くとは愚かなものよ。ここは怨霊たちによって塞がれた。やがて空気も消えうせる。窒息するがいい」

「ふーん。エラマちゃん大丈夫なの」

アリサはあまり意味を理解してないで、エラマに近づいて訊く。「私は妖鬼姫。この子の魂と身体を借りている。だから魔界の力で耐えられるのさ」

さも怖そうな表情を作り、どうだ恐れ入ったかと胸を張る。そこへフウちゃんが首を捻って言う。

「ようき姫。それならもつと楽しくしたら良いのに」

「ええい。またちゃかしおる。陽気じゃないの。それに未来の人類

標準言語のはずなのに、なんで日本語がでくんの」

「それがエラマちゃんらしいよね」

「イツちゃんが納得してうなずく。ヨツちゃんも深くうなずく。」

「起きたんなら、一緒に歌おう。歌詞ブックもあるから教えるよ」

「説明しないとわからないみたいだね。たとえば、宇宙空間では息ができないと知ってるでしょ。簡単に言えば酸素がないの。ここも密閉された瓶みたいになったわけ。中の空気はみんな吸うからなくなるし、そのまえに汚れちゃう。歌なんか歌ったらよけい呼吸するから早く空気はなくなるの」

「じゃ。外へでましょ」

アリサはドアのあるほうへ歩くけれど、霧の中から包む感じで手に圧力をかけてきて進めない。

「まだわからないのかねー。ここで助かる方法はひとつ。私。つまり妖鬼姫へ魂と身体を提供すれば良いのさ。ひとりだけ助けてあげよう」

言うときを含み笑いをする。悪魔の取引き、よく聞く話しかも。

うなずく四人ではないけれど、空気がにごり、咳を始める。

節約してゆっくり呼吸するけれど、もう酸素を吸ってる気もしい。エラマはゆっくりベッドの縁に来る。

「窓から見えるだろう。うらかな天気だねー。綺麗な空気と太陽が欲しくないかい。さあ。おいで、一人だよ。すぐに快適な気分になるから」

咳き込みながら顔を合わせるスイートレイズ。だけれど首を振るイツちゃん。

「いけないわ。私。一瞬だけ助かろうと思った。ごめん、頬をつねって」

それにフウちゃんが涙声で言う。

「私こそ。一瞬だけ、外の空気が吸いたかった。頬をつねって」
当然ヨツちゃんも首を忙しく振って言う。

「私も。一瞬だけようきひめを受け入れる思いになった。頬をつね

って」

ここでアリサ。助かる方法を考えてもいたけれど、また雷を起すとか、とっても危険なことしか思い浮かばなかった。

「私も自分のことだけ考えていたわ。頬をつねって」

顔を合わせた四人。これはどこかで聞いたような。参考文献は太宰治先生、走れメロスですね。

そういうわけで四人は向き合い輪になって右の女の子の頬を思い切りつねる。

「友情で死ぬるか。愚かなものよ」

エラマが高笑いで喋る。どこかの王様みたいには行かないねー。それでも四人の女の子は腕を挙げて指を組む。

「友情と歌のスイートレディーズ、プラスワン」

高々と宣言する。大声をあげるとよけい苦しくなるけれど、ふとみつめたエラマのうしろ。窓に何かが動いた。

大きな石の塊が浮いたというか、だれかが持ち上げたのでしょうか。それが飛んで近づく。アリサはとっさに三人の頭を押さえる。

「伏せて」

叫びながらしゃがむ。蹲る四人。ガラスが割れる。あたかも爆発するみたいな音が響いた。外の濃密な大気が吹き込んで疾風が巻き起こり、エラマが向こうのドアへ飛んでぶつかる。背中にバレーボールほどの大きさがある石も張り付く。

「だから言っただじゃん、危ない子だって」

翔太が割れたガラス窓から顔を見せて言うけれど、アリサは少し呼吸も整えないと喋られない。

翔太は中のようにすを窺うと回り込んで、急いでドアを開ける。

「しょうたー。遅いよー」

アリサは駆け寄り抱きつく。恋人になったんだから普通でしょう。「あなたが翔太さんね」

伊ッチちゃんが息を整えて挨拶するとあとの二人も並び自己紹介する。そういう状況でもないと思うけれど。

ここでエラマ。石をぶつけられて吹っ飛んで、壁に当たったのにまだ生きている。やはり魔界の妖鬼姫が尋常じゃない身体にさせているのよ。

「こらこら、和むな。まだ終わっちゃいないっつーの」

「あらー。お元気。良かったね。さすが魔界の陽気なお姫様」

アリサは相手に怪我もなく安心するし、翔太に会って気分も最高潮。

「陽気じゃないの。もう説明するのいやになっちゃう。わかったわ、あなたがたに干渉したら野望達成が遅れるだけよ」

言つと腕を挙げて広げる。それに注目するスイートレディーズ。

「うわー、きつと消えちゃうんだ。ひゅうどろん、と」

「幽霊じゃないから。やはりオンレイだからお礼したり」

「いままでのファンを逃がしたよ。へんなギャグはときと場合によるから」

一度手を下ろすエラマ。

「あのねー。現実をもっと地味で真面目なのよ。あつ。その二人無視してるね。ま。いいか」

アリサが翔太へここまでのことを話してるところ。エラマは気を取り直して怨霊を集めると黒い雲に乗り玄関から、すーと出ていった。

一件落着ということで、外の空気を思い切り吸いに出る。白い雲は点々と浮かび形を変えて流れて行く。

「そうだ。村長に会わなければ。それに、かみ、って人にも話があるし」

アリサは自分がかみのところにいないとまた人さらいをしないか心配だし、かみの正体も村人に教えてあげたい。当然恋人として心配する翔太。

「話では戦争も始まるらしいだろ。そんなところへ行くのは危ないよ」

「パパが黙っていないの。それにママも賛成してくれると思う」

女の部分では無茶しないようにと胸騒ぎがしているけれど、アリス自身、なにか使命を持ってここへ来たと感じているのね。

護身用の道具がこれほど威力を発揮するのも天啓だと考えている。ブレスレットが電気を起こして雷攻撃をエラマへ仕掛けたのに気付いてる。

「遊びじゃないぜ。だったらちょっと待ってくれ。現代科学の力で身を守ることも考えよう。持ってくるから、それまでここにいますだよ」

「うん。翔太は優しいんだね」

素直にうなずくアリス。だけれど、彼女も話を途中までしか聞いていないみたい。ここにいるとは約束してない。空に湧き出す黒雲をみつめる。

「またにわか雨かな。へんな天気だよ。そういえばここあたりも降っていたはずだが」

雨雲と思ってるのね。

「ちよつと荒れたけど、降らないよ雨は。そういうこともあるって話してたのは翔太でしょ」

確かにそんな天気もあるし、怨霊が黒雲みたいにはつきり見える。とまでは翔太も思っていないわけ。

飛行籠で翔太は去る。見送りながら、イツちゃんが空を指差す。

「妖鬼姫かしら。近くの町でなにかすると云ってたよね」

「行ってみるしかないね。まず、村長に状況を聞いてみる」

さつそくアリスは歩き出す。地球へ冷凍保存されて行くか。もしも地球人として認めてもらっても、ここが自分の生まれた星だと思う。未知なのは地球という異星。この星で生きるのが運命だと気付く。

美少女が戦場へ独り赴く。テレビで観たファンタジーを思い出すけれど、ちよつと騒々しい。振り返るとスイートレディーズがあたりを見学しながら着いてくる。

「ちよつと。小屋で待ってなさいよー。歌の練習があるでしょ」

「友達よ」

ヨツちゃんが並んで肩に手を置く。

「小屋でさつき知ったわ。一心同体、三人、いや四人で力を合わせれば、困難は乗り越えられるのよ」

そこへ駆け寄るフウちゃん。

「魂の戦いよ。怨霊なら私たちには対抗するアイテムがある。それは愛なんだわ」

当然イツちゃんが前に進み出る。

「この世界へ来たのもなにかの導きがあったからよ。私たちを待ってる世界が向こうにある。アリサちゃん、行くよ」

前を指差してずんずん歩く。だれが主役かわかんなくなっちゃった。でもさ、これで話の前置きは済んだことになるわけ。

怨霊の陰謀が渦巻くハトウシャへ、友情と愛で戦いを挑む少女たちに行く。

12話 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2081f/>

恋と疾走惑星の二重奏

2010年10月9日20時04分発行